

デジタル行政オーラル・ヒストリー - 鯖江市におけるオープンデータの取組 -

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 晃一, KAWAI, Koichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00068975

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



デジタル行政オーラル・ヒストリー ― 鯖江市におけるオープンデータの取組 ―

河 合 晃 一* (編集)

はじめに

このオーラル・ヒストリーは、日本の地方自治体におけるオープンデータの政策過程について関係者への聞き取り調査を行うことにより、既存資料のみでは把握することが難しい詳細な事実経緯、関係者の意図を明らかにし、記録することを目的としたものである。また、本記録が、オープンデータの実現のために重要となる要因の析出や実務上の課題を検討する際の一助となることも期待する。なお、オーラル・ヒストリーであるため、本稿は原則口語体で記載した。

今回、編者は、福島健一郎氏**とともに、福井県鯖江市の関係者に聞き取り調査を実施した。鯖江市は、日本で初めてオープンデータに取り組んだ先進自治体にあたる。聞き取り調査に協力いただいたのは、CIO (Chief Information Officer) としてオープンデータに取り組んだ元鯖江市職員の牧田泰一氏¹と、開発者として鯖江市のオープンデータを支えている福野泰介氏²

* 金沢大学人間社会研究域法学系准教授。

** アイパブリッシング株式会社代表取締役、一般社団法人コード・フォー・カナザワ (Code for Kanazawa) 代表理事。

1 牧田泰一 (まさたやすかず) 1980年に鯖江市役所に入庁。鯖江市政策経営部情報統計課長 (2011年4月～2012年3月)、情報統括監 (2012年4月～2016年3月)、情報政策監 (2016年4月～2020年10月) を歴任。

2 福野泰介 (ふくのたいすけ) 株式会社 jig.jp 取締役会長。福井工業高等専門学校卒業。2003年に株式会社 jig.jp を起業。

の2名であり、両名に行政職員、開発者としてのそれぞれの観点から、鯖江市のオープンデータをめぐる当時の状況等についての話をうかがった。お忙しいところ、本調査にご協力いただいたお方には記して御礼を申し上げます³。

I 鯖江市職員としてのオープンデータへの関わり（牧田泰一）

1. 鯖江市入庁後の経歴とITへの関わり

【河合】 最初に、鯖江市にご就職された当時の経緯についておうかがいしてもよろしいでしょうか。もともとパブリックな業務に対してご関心があったのかどうか、またITへのご関心について、お話をおうかがいできればと思います。

【牧田】 特に行政という仕事を望んでたわけではないんです。実家の農業を継ぐために福井に戻るという条件で金沢大学に行きました。卒業時にたまたま、鯖江市役所への応募が間に合って、採用していただきました。ITについては、就職後にコンピュータが発売されて、その可能性、行政事務の効率化について興味がありました。

【河合】 市役所に入られた直後は、まずこういった部署でお仕事をされたんですか。

【牧田】 税務課です。市民税、固定資産税などを担当しました。今思うと、税務課でよかったなと思ってます。実はたまたまそのときにPC-8001⁴で

3 聞き取り調査は、2022年6月20日に福井県鯖江市にあるHana工房にて実施した。また、本稿の執筆にあたり、話し手である牧田氏と福野氏の両名には、聞き取り調査の記録を確認していただいた。

4 PC-8001 1979年にNECから発売された国産初期のパソコン。

BASIC⁵を学んで、友達にポケコン⁶を紹介してもらったんです。それで、市民税、所得税、資産合算などの計算プログラムを作ったのが、はじめてのITに関する仕事だったと思いますね。

【河合】 それは、職場で言われたからではなく、ご自分から勉強されたんですか。

【牧田】 そうです。Basicが、コンピュータが役に立つと聞いてたので。最初はどういうふうに役に立つのか見えなかったんですけど、ちょっと使ってみると、税計算が早いということが分かったのです。所得の範囲で税が決まるんですよ。まさにぴったりだったと思いましたね。

【河合】 その後は、どういったお仕事をご担当されたのでしょうか。

【牧田】 税務課に4年いて、総務課に6年、農林課に4年かな⁷。総務課ではあまりコンピュータは関係なかったんですけど、農林課のときにはITとの関わりがありました。農家台帳（農地の転作管理データ）というのがあるんですけど、当時はそれを大型コンピュータでやっていて、転作データを紙に転記して、それをパンチャーが打つという仕事を委託していたんです。そのとき、コンピュータの受託会社が変わった関係で、そのパンチャーの業務を担当課の職員が自分でやるようにと言われ、外部委託するのはお金がかかってるので削るという話になって、突然、自分らでデータ作れと言われたんです。作業としては、数字を文字にしてつなぎ、コンピュータが読めるような定型文字列にするイメージなんですけども、桐（きり）⁸というデータ

5 Basic 1964年に開発されたプログラミング言語。1970年から1980年代のコンピュータで広く使用されていた。

6 ポケットコンピュータ（ポケコン） ポケットに入るサイズの携帯用小型コンピュータで1980年代に広く使用されていた。

7 牧田氏によれば、鯖江市入庁から情報統計課長になるまでの間に牧田氏が経験した部署は次のとおり。税務課、総務課、農林課、企画課、未来政策室、財政課、総務課、広域衛生施設組合管理課、学校教育課、秘書課、情報統計課。

8 桐（きり） 管理工学研究所が開発した国産のデータベース管理ソフト。MS-DOS

ベースソフトを使って、とりあえず見よう見まねで作ってみました。

【福島】 桐もそうですし、税務課でポケコンを使って作業されたとか、コンピュータの扱いという部分に関して、なんでそんなに抵抗なかったんですか。もともと興味があったんですか。

【牧田】 1980年頃、これからはパソコンの時代が来るみたいなことを言われていて、パソコンで何ができるのかなと、すごく興味がありました。そこで、とりあえず使ってみたのが、PC-8001でBasicでした。そして、ポケコン。電源入れて、起動時間待たなくてもそのまま使えて、瞬時に税計算できるし、これはいいかなと思って使い始めたという感じですね。

【河合】 情報統計課長になる前から、ITに関してなじみをお持ちだったということになりますかね。

【牧田】 そうですね。情報部門にいたことはないんですけど、パソコンとかIT化については興味がありました。職員が少ないので、少ない人数でもできる効率化というところはすごく考えていたように思います。

2. 秘書課長から情報統計課長として

オープンデータのきっかけになった三者会談

【河合】 鯖江市のオープンデータ導入のきっかけは、福野泰介さん、一色正男さん⁹、牧野百男市長¹⁰(当時) による2010年12月の三者会談と言われています。その会談後に、当時秘書課長をされていた牧田さんに対して牧野市長

時代から国内で広く使用されていた。

9 一色正男(いっしきまさお) 神奈川工科大学特命教授。1982年に東京工業大学理工学研究科修了後、東芝に勤務し、1999年に東京農工大学大学院工学府博士後期課程を修了。慶應義塾大学特任教授、神奈川工科大学教授を経て、2022年より現職。また、2009年から2014年にかけて W3C (World Wide Web Consortium) Site Manager に就任。

10 牧野百男(まきのひゃくお) 1961年に福井県庁に入庁。福井県総務部長等を歴任し、小浜市副市長、福井県議会議員を経て、2004年10月から2020年10月まで鯖江市長。

からはどのようなお話があったのでしょうか。

【牧田】 市長は、福野さんたち若者からの提案に対して、だいたい「検討しろ」、「進めてほしい」なんです。そのときも、「進めてほしい」というふうに聞いたと思います。

その後に予算編成の仕事があるんですけど、福野さんたちがいろんな提案をしてくれていて、その中に、公共施設のWi-Fi化や、ITをもっと市民の身近なものにするためのフォーラム、IT推進フォーラムと言っているんですけど、この二つとオープンデータを新年度に予算化するので、福野さんや田辺一雄さん¹¹たちに話を聞いて積算しろと秘書業務の中で市長に言われたんです。オープンデータについては予算はいらないと福野さんから聞いていたので、公共施設のWi-Fi化について田辺さんと福野さんに相談しながらを積算して、予算要求してほしいと担当課につなぎました。

まさかその後に自分が、オープンデータを所管する情報統計課長になるとは思ってなかったんですけど。公共施設のWi-Fi化、IT推進フォーラム、オープンデータは、4月に情報統計課ができてその所管事務となりました。

【河合】 12月ということは、予算は市長査定のタイミングだったのでしょうか。

【牧田】 市長査定が1月下旬なので、その1か月前です。

【河合】 じゃあ、もう急ピッチで準備されたんですね。

【牧田】 急ピッチなんですけど、急な話なので精度が求められているとは思っていなかったです（笑）。

【河合】 福野さんや田辺さんにご相談をしながら積算されたということなんですけども、お二方と市長とは以前からかなり協力されていたのでしょうか。

【牧田】 そうです。牧野市長は前市長のリコール後の選挙で初当選してい

11 田辺一雄（たなべかずお） 株式会社エムディエス代表取締役。福井工業高等専門学校卒業。2000年に株式会社エムディエスを起業。

るんですよね。市民が真っ二つに分かれていて、財政的にも赤字団体一步手前だったんです。そういうこともあったので、鯖江を元気にしたいということで、牧野市長には、ITで何とかしたいというイメージがあったんだと思うんです。

当選から2年たった2006年だと思うんですけど、その当時、福野さんと田辺さんと、秀丸エディタを開発した斉藤秀夫さん¹²が、福井高専の卒業で全国的に活躍されていたんですよね。それで、そのお三方に市長室に来ていただいて、いろんな意見交換をする中で、「ITのまち鯖江を目指すなら、ブログぐらいはしたほうがいいですよ」と提案されて、市長がブログを始めたんです。それ以来、ずっといろいろな相談をしていました。

オープンデータの最初の取組

【河合】 オープンデータを庁内でお進めになるにあたって、こういった業務上の課題やご苦労があったんでしょうか。

【牧田】 業務上の課題は、データ選定、作成業務、管理業務を誰が行うかで、4月に情報統計課長に着任したときから、情報統計課の職員に課題として相談していました。

それで、その年の7月に公共施設のWi-Fi化、8月にIT推進フォーラムをやって、次はオープンデータだなということで、福野さんに相談したところ、「とりあえず、データを1個」ということになりました。それがトイレ情報で、既存のものをテキストに落として緯度経度をつけただけなんですけど、そのとき悩んだのが、オープンデータをXML¹³にするというものです。ただ、デ

12 斉藤秀夫（さいとう ひでお） 有限会社サイトー企画代表。福井工業高等専門学校卒業。1993年に有限会社サイトー企画を起業。

13 XML (Extensible Markup Language) データの内容や構造を記述するためのマークアップ言語。拡張子は.xml。主にデータのやりとりや管理を簡単にする目的で使われ、

ータベースソフトのAccess¹⁴の中にXMLで保存というのがあって、それを見つけたので、なんとかいけるかなと思いました。それと、施設の緯度経度をデータにしたんですが、緯度経度の出し方、その位置を玄関にするか、施設の中心にするかでも悩みました。

トイレ情報については、公園のトイレ情報がほとんどなので、都市計画課に相談しましたが、前向きな返事はありませんでした。それで、ホームページ等で公開してあるものに位置情報を付加するだけということで、自分でデータを作り、都市計画課、財政課に決済を回したんです。

そして、公開するんですが、間違っていたらどうしようという不安はずっとありましたね。公務員として、住民情報や税などに関する業務は絶対に間違っただけいけないという意識がありました。でも今では、精度90%だから公開できないのではなく、精度90%のデータを公開して、住民参加により100%のデータを目指す考え方も必要と思っています。

【福島】 ソフトがあったのでXMLでいけるかなと思ったというお話でしたけど、当時、XML一択みたいな感じだったんですか。福野さんから「XMLじゃないと駄目」ってお話があったのかもしれないですけど。

【牧田】 XML一択ですね。当初はオープンデータというより、行政情報のXML化という言い方をしていたと思います。

【福島】 なるほど。その結果、日本初のオープンデータ自治体という形になっていたわけですね。その後、CSV¹⁵でもいいんじゃないかとか、それこそPDFでもいいみたいになっていく中で、いや、鯖江は最初からXMLだよとなって、やはり我々の中では鯖江はすごいねって言われてたんですよ。

記述形式がわかりやすいという特徴があるため、インターネット上でデータを配信する際の標準となっている。

14 Access Microsoftが販売しているデータベース管理ソフト。

15 CSV (Comma Separated Values) カンマ (,) で区切られたデータ形式。拡張子は.csv。データ容量が軽く、ファイルの互換性が高いという特徴があるため、異なるソフトウェアにデータを移行する等の場合によく用いられる。

【牧田】 「XMLじゃないと駄目」というふうに言われましたね。それとライセンスについても、CC BY¹⁶でと言われました（笑）。

【福島】 XML一択で、どうしようかと思われたわけですね。こんなの、テキストで書くのは大変だし、間違えるしと思ったら、ソフトでできるということでデータを作って出されたと。

【牧田】 そうです。

【河合】 当時、牧田さんご自身は、IT関係の新しい知識をどのように学ばれていたんですか。

【牧田】 もともとパソコンが業務の効率化につながるはずと思っていて、パソコン、表計算ソフト、データベースソフトなどは本を読んで学びました。

市役所内での調整

【河合】 オープンデータを推進していくにあたって、その後、庁内でどのような調整をされたんでしょうか。

【牧田】 初期段階ではデータ所管課の合議をとっていましたが、その後、ホームページや報告書にあるものを使用する場合は、所管課の担当者の確認のみで進めました。初期段階では調整の中で、データは誰が公開するのか、なぜ公開するのか、オープンデータの必要性はなんなのか、公開して間違いがあったら責任はどうするのか、という話がありました。それは、情報統計課内でも同様の状況でした。

【河合】 公開して間違いがあったら責任はどうするのかという点は、ほかの職員の方にどのように納得していただいたんでしょうか。

【牧田】 いや、納得はしてないですね。僕は市長から言われて、進めるよ

16 CC BY（表示） 国際非営利団体であるクリエイティブ・コモンズ（Creative Commons）が定めたライセンス形態の一つ。データ作成者に関するクレジット表示を守れば、改変はもちろん、営利目的での二次利用も許可されることを意味する。

うに言われているので、一歩でも進めるのが仕事だと思っていました。でも、できないという考えの人に押しつけるのも無理だと思っていたので。僕も立場が変われば同じようなことを多分言うと思っていたので、これはもう仕方ないと。どうなるのかも見えていなかったです。でも、責任問題になったようなことは1件もなかったです。

【河合】 庁内での仲間づくりみたいなことは当時されていたんでしょうか。若い方の中から理解してもらえる人を増やしていくといったような。

【牧田】 若い人については、小さなイベントをその当時から何回もやりました。アイデアソン、ハッカソン、そしてオープンデータのイベントが年に1度、3月にあるんですけど、そのときに、なるべく若手の職員で福野さんたちと話をするというのをやっていました。ですけど、仕事に戻って所管課の立場で考えると、業務の煩雑さに余裕がなくなるんだと思います。

【河合】 あと、ホームページや報告書にあるものは担当者の確認のみで進められたということなんですけれども、すでに外部に公表されているものであれば、確認のみで進めることができたということですか。

【牧田】 そうです。余計な仕事を増やしたくなかったのです。何というかな、もうあくまでずっと実験ですよ。実験段階ということで、進めさせてもらいました。

【福島】 やっぱり庁内の抵抗がかなり強かったんだなって、改めて聞いて感じました。その中で市長がやれと言われたから、進めるしかない、進めていこうということで肅々と進められたという、そこがすごいです。牧田さん個人は、オープンデータ自体について、良いとか悪いとかそういうお考えはお持ちだったんですか。

【牧田】 最初は、市長のミッションなので、とにかくやらなくてはという気持ちでした。なにか効果が見えていたわけじゃないんです。でも、トイレ情報を公開した翌日に福野さんのアプリが公開されて、可能性を感じました。市民と力を合わせることで大きな力になる、市民を巻き込むためにデー

タは大きな素材になるなと思いました。

情報統計課

【河合】 先ほどお話に出た情報統計課が新設されたのが、2011年4月です。情報統計課ができるまでは、情報やITは庁内のどの部署が所管されていたんでしょうか。

【牧田】 情報統計課ができる前は、企画課が情報とITに関する業務管理を担っていたんですが、市長が企画課をなくして、情報部門を総務課に、統計部門を別の部署に持っていった。その2年後に、情報統計課として再編したという経緯があります。

【河合】 新設当時の情報統計課には何人ぐらい職員の方がいらっしゃったんでしょうか。

【牧田】 9人だと思います。

【河合】 それは、牧田さんを含めてですか。

【牧田】 そうですね。統計の職員が2人で、あとは内部の情報管理の職員でした。

【福島】 情報管理ってサーバー管理とかそういうことですね。

【牧田】 そうです。

【河合】 じゃあ、ITに関する知識や理解をもともと持っている職員の方々がいたわけですね。

【牧田】 そうです。でも、その職員たちは、情報出すことに対しては反対でした。実は（笑）。

【河合】 外部から情報を守る側だったから、ということですか。

【福島】 普通の情報部門だとそうですね。

【牧田】 そうなんです。今でも言われるんです、オープンデータはおかしいって（笑）。もともと外部から情報を守る立場にいますので、情報を出すと

いう視点がないんですね。さっきお話をした、自分一人でやろうと思った理由はそこなんです。

【河合】　　そうですか。今でもそういうふうに言われるということは、当時もその人たちの説得は難しかったわけですね。

【牧田】　　説得は無理やと思いました。僕も、課長として担当職員との関係性はある程度良好にしておこうと思っていましたから、それほど強いことを言わなかったです。ちょっと様子を見て駄目やったら、もうたぶん駄目なんですね。

当時の職員からは「有名になること自体が不安や」と言われました。外部から狙われると。「オープンデータで有名になったから、5月の連休とか年末年始についてはサーバー管理をしっかりとしないと危ない」と言われていました。

オープンデータと市民・議会

【河合】　　オープンデータについて、市民や議会にはどのように説明されたんでしょうか。

【牧田】　　IT推進フォーラムやWi-Fi化については説明したと思いますが、オープンデータは予算を伴わないので、最初の段階では議会に説明していません。議会には、どうしても予算中心の説明になりますから。

議会には、ある程度話が広まって認知度が上がった段階で、オープンデータが目指すものとか、アプリを使うことで市民の福祉向上に資するといった話をさせてもらいましたね。市民には、街歩きイベントや広報誌で、アプリの使い方、有効性についてお知らせしてきました。

【河合】　　認知度が上がってからの、オープンデータに対する議会や市民の反応はどのようなものだったんでしょうか。

【牧田】　　反応はほとんどないです。アプリを紹介すると、「便利やね」と

は言っていたいていましたが。

【河合】 2012年1月にトイレ情報を公開されて、同じ年の3月には、LODチャレンジ2012（Linked Open DataチャレンジJapan 2012）¹⁷で公共LOD賞を受賞されました。オープンデータに関する実績ができた後、議会や市民の反応はどうだったんでしょう。

【牧田】 公共LOD賞を受賞してからすぐ、総務省に来てほしいって言われて、総務省の担当の人にオープンデータについての説明とか、内部でどういうことが問題になるのかという話をしました。ただ、この段階では、議会、市民の反応はありませんでした。同じ年の7月に電子行政オープンデータ戦略で鯖江市が紹介されて、日経新聞、NHKなどで紹介されて、外から徐々に浸透していった感じです。

【河合】 2010年4月に鯖江市で施行された市民主役条例の第10条には、市民と行政との情報共有について書かれていますし、条例施行後に市民主役事業を開始しておられました。オープンデータの取組を進めるにあたって、市民主役条例の存在はやはり大きかったんでしょうか。牧田さんご自身はどのようにお感じになっていらっしゃいましたか。

【牧田】 市民主役条例がなくても、オープンデータはできたと思います。牧野市長の考え方自体がオープンで、市民と一緒に行政をよくしたい、鯖江市をよくしたい、それも若い人たちの意見を聞きながらという考え方なんです。そういった市長のオープンな考え方が、オープンデータを進めたということになると思います。

【河合】 職員の方とか、議会や市民にオープンデータの話がされるときに、この市民主役条例があるから説明しやすかった、ストーリー性をもたせることができたという面については、どのようにお考えでしょうか。

17 Linked Open DataチャレンジJapan Linked Open Data（LOD）の技術普及の促進を目指したオープンデータのコンテスト。LODとは、ウェブ技術を利用して、コンピュータが処理しやすい形式で情報を共有する仕組みを指す。

【牧田】 それはそうですね。オープンデータの取組を進めるにあたっては、ストーリー的にも説明しやすいですし、市民参加によるまちづくりへの興味を若者に持ってもらうことができ、それはすごくよかったと思います。

実は市民主役条例自体も、条例はできたけれども、細部にわたってはまだまだなんです。情報の公開についても、例えば説明会みたいなのをするという規定なんです、本当はね。でも、実際動いてないですね。とはいえ、市民が創った条例なので、あるべき姿に向かってやっぱり日々努力すべきところなんだと思うんです。現実とのギャップを認めながら、それをエネルギーにしていけばいいと思うので。

3. 情報統括監として

オープンデータに関する職員の意識と研修

【河合】 2012年4月に政策経営部の情報統括監にご就任されました。その後のことについておうかがいします。まず、この情報統括監のポストは、いわゆるCIO（Chief Information Officer）だと思うんですけれども、職位としては部長なんでしょうか。

【牧田】 情報統括監になったときは部長の下で次長だったと思いますが、翌年、部長級になりました。

【河合】 このポストは、やはり牧田さんがおなりになるにあたって新設されたものなんでしょうか。

【牧田】 はい。市長は、職が人をつくるみたいな考え方を持っていて、もっと頑張れみたいな感じやったと思いますね。ただ、そのとおриにはなかなかいかないんですけど（笑）。

【河合】 牧田さんご自身は情報統括監の仕事をどのようにイメージされていたのでしょうか。情報統計課長の上の立場で、オープンデータを引き続き推進するというイメージだったんですか。

【牧田】　　そうです。一段上の視点で庁内を見ろということだったと思うんです。でも、実際そうなったところで、なかなかうまくいきませんでした。職員は変わらないんです。たぶん職員は現場できゅうきゅうしていて、目の前の仕事で精一杯だったように思います。というところで挫折するんですけど。

【福島】　　情報統括監になってもうまくいかなかった。職員は変わるわけではないからというお話がありましたけど、たとえば市長に、自分が上になってもうまくいかないから、職員をどうにかしてほしい、と相談されたりしなかったんですか。

【牧田】　　それは職員をいじめるだけなので。

【福島】　　なるほど。

【牧田】　　現場の仕事のつらさというか、個人差はありますが、きゅうきゅうしているのは見てればわかりますので。

【福島】　　まったく新しい、しかもよくわからない未知のことにもっと力を割いてくれと職員の方々に言って、いやがっているのに、上からやれってなるのはよくないなと思われたんですね。

【牧田】　　それはもうできないと思っていました。

【福島】　　なるほど。最近だと、オープンデータの人材教育をしたほうがいいという流れで、デジタルDX教育とかってやっていますが、そういったことは当時されていたんですか。

【牧田】　　やりました。それは一番大事やと思っていてやりました。2時間ぐらいの職員研修を全職員対象でやりましたね。でも、反応はない。かえってややこしい（笑）。

新採職員についてもやりました。ただ、今は官民データ活用推進基本法¹⁸ができて、もうオープンデータは当たり前なんです。最近の新しい職員にと

18 官民データ活用推進基本法　2016年12月に施行。同法において、国及び地方公共団体はオープンデータに取り組むことが義務づけられている。

っては、市役所に入ったときからオープンデータがあたり前なので、今はことさらに言う必要ないと僕は思っています。だから、新しい職員はやってくれると思いますね。

NPO法人エル・コミュニティとの連携

【河合】 2012年11月に、NPO法人エル・コミュニティの主催でオープンガバメントサミットin鯖江が開催されていますが、エル・コミュニティ代表の竹部美樹さん¹⁹とはどのような経緯で協力関係を構築されたのでしょうか。

【牧田】 オープンガバメントサミットは、オープンデータの前にオープンガバメントがあるということで、福野さんの提案で開催しました。

竹部さんは、福野さん、田辺さん、斉藤さんと並ぶ鯖江のIT人で、2011年からIT推進フォーラムをサポートしていただいています。それで、2012年8月に第2回目のIT推進フォーラム（電腦メガサミット）をやるんですが、同じ年の11月にオープンガバメントサミットというイベントをまたやるのはつらいと僕が福野さんに申し上げたら、エル・コミュニティさんの主催でやるので協力してほしいという話になりました。

その当時、竹部さんは、鯖江市地域活性化プランコンテストをすでにやっていたんですね。福野さんとしては、もともとその活性化プランコンテストで人材育成を竹部さんと一緒にやっていたので、オープンデータでも一緒にということだったんだと思います。

【河合】 竹部さんと牧田さんは、それまでご面識はなかったんですか。

【牧田】 そうですね。2011年のIT推進フォーラムまでは面識がなかったです。

19 竹部美樹（たけべみき） NPO法人エル・コミュニティ代表。ITベンチャー企業等での勤務を経て、2008年より鯖江市地域活性化プランコンテストを開催。2012年にNPO法人エル・コミュニティを設立。

【河合】 2015年にはHana道場²⁰が開設されます。開設のきっかけは何だったんでしょうか。

【牧田】 Hana道場は、SAPさん²¹が地域貢献事業ということで福野さんの活動を支援したいということがきっかけだったと思います。

【河合】 なるほど。SAPからは、鯖江市役所に対する支援というより、福野さんに対する支援として提案があったということなんでしょうか。

【牧田】 たぶんそうだと思うんですけど。SAPさんは自治体の支援はできないので、鯖江市のNPOに支援したいということでした。その支援先を探していて、プログラミングとかIT人材の育成という観点から、Hana道場の開設が支援対象になったんだと思います。

【河合】 Hana道場の建物自体は、鯖江市役所が管理されているのではなくて、そちらも含めエル・コミュニティさんがぜんぶ管理されていらっしゃるんでしょうか。歴史的な建築物なので、建物自体の所有権は鯖江市にあるのかと思ったのですが。

【牧田】 建物は民間の方のものです。それを借りています。

【河合】 そうなんですね。鯖江市は、Hana道場の運営に対して何か財政的な支援をされていらっしゃるんでしょうか。

【牧田】 財政的な支援はしていないんです。竹部さんは、「自治体から支援はしてもらうけど、補助金は一切もらっていない」といつも言っています。

20 Hanaオープンイノベーション道場（Hana道場） 2015年11月、国指定登録有形文化財（建造物）である旧鯖江地方織物検査所（現代アートセンター）に、地域におけるオープンイノベーションへの取組の場として開設。NPO法人エル・コミュニティが運営。

21 SAPジャパン株式会社 ドイツに本社を置くヨーロッパ最大級のソフトウェア会社SAP SEの日本法人。

総務省の情報流通連携基盤構築事業

【河合】 2013年9月に総務省の実証実験である情報流通連携基盤構築事業に横浜市さんと一緒に参加されています。この辺りのご経緯はどういったものだったのでしょうか。横浜市さんとは、オープンデータに関してもともとお付き合いがあったのでしょうか。

【牧田】 横浜市さんとお付き合いは、あるのはあったんです。オープンデータの取組を紹介する講演会とかで一緒させていただくことはありました。

でも、この実証実験の話を、当時、僕は全然知らなかったんです。たぶんNTTデータさんですかね。福野さんの会社が受託したんじゃないかなと思うんですけど。そこで、うちが自治体として協力する、そういう仕組みづくりに対し成果品を使ってみて意見を言うという関与の仕方です。横浜市さんとは人口規模が全然違うので、大規模な自治体と小規模自治体でのオープンデータ活用のあり方、基盤のあり方を検討するという感じでした。

【福島】 たしかに当時の記事だと、福野さんの会社のjig.jpさんが総務省の事業を受託したという書き方をなさっていますね。

【牧田】 そうです。

【福島】 なるほど。その実証実験の地域として鯖江市がjig.jpの所在地から選ばれたという関与の仕方なんですね。

【牧田】 そうです。

【河合】 事業の途中経過あるいは事業の終了段階で、牧田さんが直接報告を受けたということもなかったのでしょうか。

【牧田】 ないです。ないけども、その実証実験でできた成果品を鯖江市にも使ってほしいということでした。そのウェブサイトは、今でも使っているはずですね。

【河合】 なるほど。その成果品が、その後の5つ星オープンデータ²²の実験につながってくるのでしょうか。

【牧田】 データは、最初から5つ星を目指していたと思います。5つ星のオープンデータを目指して情報流通連携基盤をつくるというものです。ただ、それはなかなか難しかったので、今もまだ続いています。5つ星のハードルが結構高くて、後でいろいろ問題になる共通語彙基盤の話とかに煮詰まっていたんだと思います。

【福島】 この頃すでに私もシビックテック²³をやっていたので覚えているんですけど、当時の総務省さんは、今でも難しいことをかなり野心的にされようとしていたんですね。だから、事業として一応やったけど、それが大きく広がるということはやっぱり難しかったんですね、きっと。

【牧田】 難しかったですけども、ただ、これがあったから、今に続くいろんな取組が進んだとは思っているんですけど。

【福島】 なるほど。そうですね。データの統一化とか、今、データ連携基盤とか言っていますが、それと同じ感じで、情報流通連携基盤の構築を目指すということが書いてあって。

【牧田】 そうです。

【福島】 そうですね、10年かかって今やっという感じですね。

【河合】 実証実験後に横浜市さんとオープンデータに関して情報交換等を

22 5つ星オープンデータ (Five stars of open data) ティム・バーナーズ=リーが提唱した、オープンデータの評価システム。最高の5つ星を取るためには、当該データが次の五つの条件をすべて満たす必要がある。①オープンライセンスでウェブから入手可能であること、②構造化されたデータになっていること、③標準化された形式になっていること、④識別子としてURIを使用していること（※URIとは、ウェブ上にあるあらゆるファイルを認識するための識別子の総称であり、URNとURLで構成される）、⑤他のデータソースへのリンクを含んでいること。

23 シビックテック (Civic Tech) シビック (市民) とテック (テクノロジー) を合わせた造語。ITを使って市民が主体的に地域の様々な課題を解決することを指す。

することはあったんでしょうか。

【牧田】 横浜市さんと情報交換するということはなかったです。2013年に横浜市議会さんが視察に来られたことはありましたけれども、自治体の規模が違いすぎて、情報交換はありませんでした。

オープンデータをめぐる他自治体との関係

【河合】 福井県内のことについてお尋ねしたいと思います。2013年5月に福井県でオープンデータキックオフセミナーが開催されて、11月に福井県データカタログサイトが開設されました。オープンデータに関して、鯖江市は先進的存在だったと思いますので、県内のほかの自治体から問い合わせがあったんじゃないかと思うんですが、オープンデータに関する日常的な情報交換等はされていらっしまったんでしょうか。

【牧田】 自治体間ではあまりないです。福井市さんと敦賀市さんから、消火栓のデータやGTFS（General Transit Feed Specification）²⁴についての照会はありましたけれども、それ以上の話はなかったように思います。

実際難しいんです。「こういうデータを作れば、福野さんのあのアプリ上に反映されますよ」というような話はしましたけど、それだけぐらいで。うちとしても、オープンデータを少しでも広めようという思いはあったので、オープンデータの普及に関する話が福井県さんから何かあれば全然異論はなかったんですけど、なかなか難しかったように思いますね。

このカタログサイトができた後に、東京大学の特任教授の先生方がGTFSとして普及させたいということで福井に来られたんですが、その段階でのやりとりも、福井県と二、三の市町だけやったと思います。

24 GTFS（General Transit Feed Specification） 経路検索サービスや地図サービスへの情報提供を目的として策定された、公共交通の時刻表や地理的情報に関するデータの世界標準データフォーマット。

【河合】 県内のほかの自治体でご講演されて、そのときに相談を受けるということはあったのでしょうか。

【牧田】 はい。県の情報担当者の会議で講演とか、越前市さんにも行きましたね。行きましたけども、なにぶん細かい話まではできませんので。もちろん、相談されたら答えましたけど。そこまでまだ盛り上がってなかったんだと思いますね。

【河合】 鯖江市へ視察に来た自治体は、県か市町村かかというと、市町村のほうが比較的多かった印象ですか。

【牧田】 市町村のほうが圧倒的に多いです。初期段階では県に呼ばれたこともありましたけど。

高齢者のIT活用推進と小中学生のプログラミングクラブ活動

【河合】 2012年以降に高齢者のIT活用の推進や小中学生を対象にしたプログラミング指導の推進に取り組まれた経緯や、その際、市役所内あるいは小学校や高年大学とどのように調整されたのかについてお聞かせいただけますか。

【牧田】 高齢者のIT活用については、その当時、いろんな方から鯖江市と一緒にやりたい、鯖江市に提案したいというお話をいただいていた。その中に、ソフトバンクさんからiPadを無償で3か月貸していただくというものや、株式会社たからのやさんから、ふれあいITカフェ（ITお困りごと相談）の提案があって、そのお話をそのまま受ける形で、iPadを高齢者の方に使っていただく研修を高年大学²⁵で行ったのが最初です。

行政としては、単発的なものじゃなくて、やるんやったら長期的にやって

25 鯖江市高年大学 1979年に開設された鯖江市にある生涯学習施設。60歳以上の鯖江市民を対象にしたカリキュラムが設定されており、その中にパソコンクラブの活動が設けられている。

いかなあかんと思ったんで、現在まで続けています。

【河合】 なるほど。研修を実際に受けられた方々や周りの反応はどうだったんでしょうか。

【牧田】 皆さんに「便利やね」と言っていたいで、喜んでいただいています。高年大学というのは、鯖江市内で高齢者が学べる唯一の場なんですね。そこに来られているのは、少し意識の高い方で、地元で発言力がある方たちなんです。その方たちが今もう80歳を過ぎてフェイスブックをやりながら僕らの活動を応援してくれていて、地元の人や後輩の人たちに、自ら教えたり、研修を勧めたりしてくれていますので、やってよかったと思っています。

小中学生を対象にしたプログラミング指導は、PCN（Programming Club Network）活動²⁶を進めてきた福野さんたちの提案です。福野さんたちは、IT人材が日本では足りない、もっと人材を育成していかないと日本が世界から遅れていくという視点で、プログラミングを普及させるためのPCN活動を2010年以前からしていました。

ただ、国外ではRaspberry Pi²⁷とかいろんな教材があるけれども、日本でそれをやろうとするとまだまだハードルが高い。小学校2年生ぐらいでも扱えるようなものというので、タブレットを使った教材とかいろいろな試行錯誤のすえに、福野さんがIchigoJam（イチゴジャム）を2014年に作りました。これなら、30年前のパソコンの環境とそっくりで、電源を入れればすぐに誰でも使える、お小遣いで買えると。

じゃあ次に、行政として、そのPCN活動をどうサポートするかということろなんですけど、福野さんがIT人材の育成に関する課題を牧野市長に相談し

26 PCN（Programming Club Network） 子どもたちにプログラミングの機会を提供することを理念に掲げたサークル活動のこと。日本では、総務省が、次世代を担うIT人材の育成という目標を掲げて、域課題解決等をテーマにプログラミング等のICT活用スキルを学び合う場としての地域ICTクラブを推進している。

27 Raspberry Pi（ラズベリーパイ） イギリスで開発された教育用コンピュータ。シンプルな構造のため、プログラミングの教材として広く普及している。

たら、市内の小中学校の授業でできないか検討するように言われました。それで、僕の知人の校長先生に相談したら、クラブ活動でならやってもいいと言っていた。その学校が、鯖江東小学校でした。

【河合】 じゃあ、小学校のクラブ活動でIchigoJamを使うための調整は、牧田さんご自身が鯖江東小学校の校長先生と直接やりとりをされて、何とか理解をいただいたということだったんですね。

【牧田】 そうです。もう直接交渉じゃないととても通せないような話なので。

【河合】 IchigoJamを使ったクラブ活動に対する市民の方の反応は当時どうだったんでしょうか。

【牧田】 そこは特に反応なかったと思いますね。だって、そこまで知られていないんですから。そもそも、一つの学校だけでそういうことをすること自体、行政としてはおかしいんですよ。

【河合】 公平性の観点から問題になるわけですか。

【牧田】 そうなんです。当時、市長と教育委員さんとが意見交換する総合教育会議で、市長がIchigoJamを使ったクラブ活動を強く勧めて、少しずつ広がっていきました。

4. 情報政策監として 情報政策監としての仕事

【河合】 2016年3月に定年で鯖江市役所をご退職された後、4月に情報政策監へご就任されていらっしゃる。このポストは非常勤だったんでしょうか。

【牧田】 非常勤嘱託です。

【河合】 情報政策監に就任されたのは、引き続き牧田さんがオープンデータを担当するように、という牧野市長のお考えですか。

【牧田】 そのとおりです。

【河合】 なるほど。情報政策監としてのお立場は、その前の情報統括監のお立場と実質的には変わらずということでしょうか。

【牧田】 一緒なんですけど、議会には出席しないことになりました。

【河合】 ちなみに、牧田さんの代わりに別の方が新しい情報統括監になったわけではなくて、牧田さんが情報政策監として、情報統括監の時のお仕事をそのままされたということですね。

【牧田】 そうです。

【河合】 嘱託職員ということでしたが、情報統括監の時と同じようにCIOとして全庁的な調整をすることは可能だったのでしょうか。

【牧田】 調整は可能でした。統計を所管していましたので、統計をオープンデータにするところはずっと引き続きやっていました。

【河合】 現在の鯖江市に、CIOのようなポストはもうないんですか。

【牧田】 今の鯖江市にCIOという職はないです。

【河合】 現在、牧田さんの後継者のような方は庁内にいらっしゃるのでしょうか。

【牧田】 そっくりそのまま引き継いでいる者はいないです。いないんですけども、今は官民データ活用推進基本法ができて、最近の新しい職員にとってはオープンデータが当たり前のことになっています。そういうふうに分で自分を納得させています。

小学校でのプログラミング授業導入

【河合】 2018年4月に鯖江市内全小中学校でプログラミングクラブの運営が開始されて、翌年4月には鯖江市内全小学校の「総合的な学習2時間」にIchigoJamを使ったプログラミングが導入されました。このときの経緯についてお聞かせください。

【牧田】 先ほども申し上げたんですけど、市長としてはプログラミング教育を進めたいと考えていて、総合教育会議でそのことを発言し、学校教育の基本方針の中でも明記され、具体化するまでになったわけです。2020年度からプログラミングが義務教育で必修化されることもあって、機運的にはだんだん上り調子でした。

教材としてIchigoJamを使うことについては、プログラミングクラブで4年間の実績を積んでいたもので、この時、反対意見はなかったです。

ただ、プログラミングを学校で教える側の人材が足りないという問題がありました。それまで、プログラミングクラブについては情報統計課が主管していて、学校のサポーターの手配とかも情報統計課がしていたんですけども、これを機に外部委託で竹部さんのエル・コミュニティに移管するようになりました。もともとは、IT推進フォーラム、高年大学の講座を受けた人の中から学校教育に理解のある人を探していたんですが、現在は、Hana道場で人材育成も担っていただいています。

【河合】 全小学校の授業となると結構なボリュームの仕事になると思うんですけども、それを全部委託されたんでしょうか。

【牧田】 義務教育の部分は、義務教育化されたときから委託しました。ただ、総合的な学習の時間というのは、クラブ活動と違って、たとえば午後の3時頃からどの学校でも一斉にやるというものではなく、学校によって時間がばらばらなんです。ですから、同じ人材を各学校に派遣することができます。

5. オープンデータの成果と今後の課題

オープンデータの推進を支えた要因

【河合】 最後に、鯖江市のオープンデータのこれまでの成果と今現在の課題についてお考えをおうかがいしたいと思います。鯖江市は、日本で初めて

自治体としてオープンデータを導入して、かつ着実に成果を出してこられた、非常に先進的な自治体だとやはり思います。実現できた要因を、牧田さんご自身は、どのように考えておられますか。

【牧田】 そうですね、牧野市長と福野さんが、たまたま同じ時期に同じ方向を向いていて、市長が福野さんの意見を取り入れたということがすべてだと思います。

今までの行政の価値観ですと、ゆるやかやけれども行政としての確実な動きというのが求められていたと思うんです。ただ、いまの時代は、ITによる大きな変革期、移行期だと思います。ウェブでのオープンな動き、オープンデータ、オープンソース、オープンナレッジなど一部の挑戦的な動きを積み重ねることで、世界の人を巻き込み、大きな変革を生み出しています。その動きに対して、行政としては未着手の分野で効果も見えないものでしたが、「何でもやってみる」考えの市長が、若者の提案でオープンデータを実験的に行い、ある程度の方向性が見えた。

一方で、鯖江市のオープンデータの意識が、市役所の中で確実に浸透しているかという点、そこまではないと思いますね。実際、職員から、福野さんのサポートが必要とか、僕がいなくなったことでオープンデータの動きが止まるとか、心配する声があるんですけども、それは違うんやね。オープンデータの意識がその人にならなから、そういうことを言うわけです。

新しく入ってきた職員にとって、オープンデータは当たり前のことになったわけですから、自分たち自身でやるべきことを考えてほしい。本来そうなるべきなんでしょうね。業務の中で新しいアプローチが必要なときや困難な課題があるときに、オープンデータは市民を巻き込んだITを活用した動きを活発化してくれます。そのような挑戦を続けていくことだと思います。

【河合】 牧田さんがご執筆された2018年の論文に、アプリについては「多くの市民が便利と感じるまでには至っていない」、また「市職員のデータ公開に対する理解も、初期と比べると進んではいるものの、求められる正確性

や責任をもつことへの不安が妨げとなり積極的に公開する意識はそれほど高まっていない」という課題が述べられています²⁸、いまのお話からすると、現在もこの状況は変わっていないということでしょう。

【牧田】 変わってないです。自分事として誰もまだ捉えてないので。たとえば、新聞にお悔やみ情報とか赤ちゃん情報とかありますよね。オープンデータを始めた2012年当時から、そのデータを公開してほしいと言ってきたんですが、データとしては出せないと反対する所管課がありました。でも、情報としては市から新聞社に公開しているんです。すでに新聞社へ公表している情報なんだから、すぐにでもデータとして出せると僕は思っていたんですけど、できなかった。データ公開に対する必要性が高まっていないんだと思います。

将来的には、何かきっかけがあって、データ公開に対する考え方が浸透すると思っているんですけど、なかなか難しい。

たとえば、Googleのローカルガイドみたいに、パブリックなネットワークの中で自分の情報を自分で出すという仕組みが、一人ひとりにとって当たり前にならないと、たぶん駄目なんだと思います。グーグルマップの画像や情報、オープンストリートマップの地図の充実なんかもそうなんですけど、その地区に住んでいる人が自分の近くの情報を入れていけば、あっという間にできるんですね。

【河合】 こういうアプリを作ってほしいという要望が、市民の方から市役所のほうに直接届いたことはなかったんでしょうか。

【牧田】 ないです。市のお悩み相談とかあって、その中で市民の方からの要望とかはずっと聞いていたつもりですけども、アプリに関する要望はなかったですね。ハッカソンを開催して、課題解決のためのデータ活用という話をして、市民のほうからアプリを作ってほしいという要望はなかったよう

28 牧田泰一・藤原匡晃（2018）「官民一体のオープンデータ利活用の取り組み——先進県・福井、データシティ鯖江」『情報管理』第60巻第1号、805頁。

に思います。

【河合】 オープンデータを導入、展開するにあたって、ほかの自治体でも共通して重要となる要因、あるいは、どの自治体であっても直面するであろう課題について、お考えがあればお聞かせください。

【牧田】 官民データ活用推進基本法でオープンデータは前提になったので、身構えることなく、少しずつ進めていくことだと思います。自治体や課題によってアプローチは違ってくると思いますが、市民を巻き込んだ活用を一步ずつ、進めることだと思います。そして、他の自治体の成功事例は、遠慮なく活用していくことも大事だと思います。

あと、これからの職員には、オープンソースのデータを活用してアプリを作る能力や、データ分析をする能力もたぶん必要になってくるんです。高いところは求めてないんですよ。マクロを作るみたいな感覚がたぶん求められてくると思うんですね。

情報の公開を進めて、行政職員が市民の中に入って、市民と一緒に行動することも大事だと思います。

【河合】 それこそ、小中学校でプログラミング教育を受けた世代が市職員になれば、がらっと変わるということですかね。

【牧田】 全然変わると思うんです。今でも、グーグルフォームとかを使える若手の職員がいれば、仕事が実際変わってきています。もうちょっとなんでしょうね。

【河合】 なるほど、よくわかりました。ありがとうございました。

【福島】 ありがとうございました。

【牧田】 こんな感じでよろしかったでしょうか。ありがとうございました。

Ⅱ 開発者としてのオープンデータへの関わり（福野泰介）

1. 三者会談の経緯

【河合】 2010年12月に福野さんと一色さんのお二方で牧野市長と会談をされて、そこでデータシティ構想のお話になったと思うんですが、当時どういった経緯で、牧野市長にオープンデータを提案されようと思われたんでしょうか。

【福野】 もともと、jigブラウザ²⁹という事業があったんですが、残念ながら日本の携帯事業はグローバル化に失敗しました。そんなわけで、スマホの台頭に合わせて、どんなビジネスをしようかなと考えていたときに、W3C（World Wide Web Consortium）³⁰から誘いがあったんですね。それで、せっかくならちょっと面白いブラウザを作ろうと思って、W3Cに加入することを決めました。

W3Cの世界会議が毎年あるので、それに行ってみたら、ウェブ発明者のティム・バーナーズ＝リー氏³¹がいて、ちょっとテンションが上がりました。その会議の基調講演で彼が話したことがオープンデータだったんです。

新鮮だったのは、当時、HTML5全盛期で³²、HTML5がどうなるのかということがW3Cでもメインピックだったんですけど、ティム・バーナーズ＝リー氏は一切そのことに触れずに、オープンデータのことばかり言ってい

29 jigブラウザ（ジグブラウザ） 株式会社jig.jpが開発した、携帯電話からインターネット上のウェブページを閲覧するためのウェブブラウザ。

30 W3C（World Wide Web Consortium） ウェブの長期的発展のために、インターネット上で使用される技術の標準化を推進する国際コンソーシアム。各種技術の情報提供、仕様策定と促進、新技術のプロトタイプの実装等に取り組んでいる。

31 ティム・バーナーズ＝リー（Tim Berners-Lee） 「ウェブの父」として知られる英国のコンピュータ技術者。World Wide Webの概念を考案し、インターネットの基礎を築いた。

32 HTML5 HTML（HyperText Markup Language）とは、ウェブサイトのコンテンツの構造を記述するためのマークアップ言語。HTML5は、HTMLの改訂第5版にあたる。

たんですね。それが面白くて、オープンデータの分科会にオブザーバー参加したら、政府のオープンデータを使ってどうこうみたいな議論があったんです。それで、その会議が終わった後に「いや、そんなことよりもまちのオープンデータのほうが面白くない？」みたいな話を誰かに振ってみたら、「それ、ナイスだね。やったら？」と言われたので、「じゃ、やるか」となったのが、オープンデータに関心を持ったきっかけですね。

オープンデータのことを一色さんに相談したところ、「日本のオープンデータはなかなか進まなくて」みたいなことを言われたので、「鯖江市長だったらやるって言うと思いますよ。一度一緒に行きましょうよ」という話になりました。

もともと、2006年から鯖江市長に呼ばれて、鯖江をITのまちにしたいという市長の考えは聞いていたんです。こちらもいろんなことを市長に話してましたから、きっと何か考えてくれるかなと思っていたんですね。それで、市長に話を持っていったというのが経緯です。

【河合】 福野さんご自身は、行政やパブリックな領域に対して、もともとご関心をお持ちだったんでしょうか。

【福野】 そうですね。ちょうどよかったのは、2010年に制定された市民主役条例の第10条に市民と行政との間の情報共有に関する規定があって、その文脈にもオープンデータはちょうど合っていたということだと思いますね。

【河合】 なるほど。

【福野】 私自身は鯖江市民でもありますし、オープンデータという形で情報共有してくれたら市民としてうれしいと。しかも、オープンデータは別に予算が必要なわけでもないですし、「まずはお試しなので、激しく変わるようなデータじゃなくていいです。あまり変わらない、例えば公衆トイレの情報とかでいいです」という話をしたんですね。その結果、その場にいらっしゃった秘書課長の牧田さんが、「じゃ、牧田さん、よろしく」みたいなことを市長から言われる形で、なんとその場でやることが決まりました。

【河合】 開発者としてのお立場からすると、オープンデータを地域で進めること自体にどういうメリットがあるとお考えでしょうか。

【福野】 やっぱり自分自身が住んでいるまちがより住みやすくなるのは大歓迎ですね。特に市役所関係のやりとりって、面倒くさいイメージがずっとあるわけですよ。わざわざ行くのかとか、行って待つのかとか、何でオンラインできないんだ、みたいな話は、当たり前ながら思っているんですね。

あと、うちの会社としては鯖江を開発センターにしているので、いろんな新しいエンジニアに鯖江に来てほしいんです。それで、プログラマーが快適に過ごせるまちというのができたら、それはすてきだなと思って。プログラムで解決できるまちというのは結構熱いんじゃないかなというのが、オープンデータがいいなと思ったポイントですね。

もう一つ、強いて言えば、国際競争の問題です。すでにイギリス政府がオープンデータをかなり進めていて、アメリカの連邦政府も2009年5月にオープンデータのポータルサイトの運用を開始していたんです。この調子で日本が置いていかれると、データというインフラで国際的な後れをとる。インフラで後れをとるって結構痛くて、道路、水道、ガス、電気がないところに産業が立ち上げるわけないんですね。そういう意味ではデータとしてのインフラがちゃんとあるまちというのを日本または鯖江で創ってもらうことが、これからのアプリケーション会社としては重要だなと思ったということです。

【福島】 三者会談のお話はいろんな記事で読んだことがありますけど、福野さんも最初に市長に会いに行って、その場ですんなりオーケーになるとは思っていなかったんですね。

【福野】 そうですね。

【福島】 やっぱり、牧野市長だったから、こうやってオープンデータをやれたという感じですか。

【福野】 はい、そう思います。

【福島】 やっぱりそうですか。属人的な要素が大きかったと。

【福野】　そうですね。オープンデータが鯖江で始まった後にそう思うようになったんです。オープンデータが鯖江で始まって何かすごい騒ぎになって、結局誰もやっていなかったんだということがわかり、そこからいろんな自治体に行ってオープンデータの話をしたんですけど、「何かまだあんまり実績出てないし、何かよくわかんないからいいわ」みたいな反応をされました（笑）。

【福島】　そこで、鯖江市は特別だったんだということを感じたと。

【福野】　そうですね。

【福島】　なるほど。今もそうですもんね（笑）。

【福野】　今も半分そうですね。なので、前例がないものを自治体でやること自体が非常に珍しいことだったんだと、後からわかった感じですね。

2. オープンデータ推進を支える存在

【福島】　その後、アプリ開発とかいろいろなことを鯖江で進めていく中で、大変だったことは、なかったんですか。

【福野】　大変だったことは、全くないですね。

【福島】　全く？やりやすかったんですか？

【福野】　本当になかったです。牧田さんのおかげで（笑）。データは、牧田さんから「今度こんなのやってみました」ってどんどん来るので、「いや、タグ名は日本語じゃないほうがいいかな」とかいろいろやりとりをしました。それで、私が「こんな感じでいいと思いますよ」と言った瞬間にデータがウェブサイトが上がって、おっ、こんなにすぐ上がるんだと。

【牧田】　決裁なしですから（笑）。

【福野】　いや、牧田さんのフットワークの軽さはベンチャー企業以上だなと。むしろこっちがいろいろ足を引っ張ったんじゃないかって思うぐらい、市役所さんには何の苦労もありませんでした。

【福島】 そうなんですね。

【河合】 牧田さんの存在は、オープンデータを進める上でやはり非常に大きかったんですね。

【福野】 いなかったら、絶対に進んでいませんでした。オープンデータが進まないパターンは二つあります。まず、市長に理解がないというパターン。市役所の職員の人がどんなに熱心でも、市長の理解がないと市としての判断ができないので、進まないんですね。もう一つは、市長が「オープンデータ、いいね」と言っても、市役所の職員のほうに響かないと駄目。だから、両方そろって初めてできるというのが、このオープンデータかな。あとは、前例も何もないところで鯖江市がやったというのは、ある意味奇跡だったんだなと後から思います。

【河合】 福野さんはオープンデータ伝道師としてほかの自治体さんとの付き合いもあると思うんですが、オープンデータを比較的うまく進めている自治体の中で、成功の鍵になっている要因、共通している要因はあるんでしょうか。今おっしゃっていただいたような、首長さんや職員さんの理解以外に、例えばNPOの存在は関係してくるんでしょうか。

【福野】 間違いなく、そのNPOですよ。やっぱりその地域で、オープンデータをちゃんと活用する人、市民側で活動する人がいないと、市役所もデータを出したっさりになってしまいます。オープンデータをその地域で回さないといけないわけです。あるいは、市役所の人自身がアプリを作ってもいいと思います。そういうケースもなくはないですね。宮崎県でしたっけ、GIS (Geographic Information System)³³のすごいところ。

【福島】 ひなたGIS³⁴でしたっけ。

【福野】 ひなたGIS。いずれにしても、やっぱり引っ張っていく存在が要

33 GIS (Geographic Information System) 地理的位置に関する情報をもったデータをコンピュータ上で作成、管理、利用等ができる地理情報システム。

34 ひなたGIS 宮崎県職員が開発し、宮崎県が運用しているウェブGISサービス。

りますね。

【福島】 だから、首長や担当者、オープンデータを引っ張っていく存在がそろっていると、理想的にすっと進むということですね。なるほど。

【福野】 はい。一時期、ほかの自治体の人から「うちのまちには福野さんがいないからオープンデータが進まない」と言われることもありました（笑）。そういうときは、「だからデータの標準化が大事なんだ」という話をしていたんですけど、物理的に離れていると、なかなか熱量が伝わらない。やっぱり、そのまちで活動する人が必要なんだと思いますね。

3. プログラミング教育

【河合】 鯖江市のIchigoJamを使ったプログラミング教育は、福野さんのご提案だったという話をうかがったんですけども、もともとどういった経緯で始められたのでしょうか。教育を受けた世代が後々オープンデータを進めていく存在になるだろうというところまで、当時考えておられたのでしょうか。

【福野】 そうなんです。もともと、鯖江には高専があるし、高専生がアプリを作ってくれたらいいじゃんと思って、「オープンデータの先進地域なんだから、みんな作ろうよ」という話を福井高専の4年生にしに行ったんですね。でも、「この中でプログラム好きな人いますか」と聞いたら、誰もいないんですよ。思わず先生の顔を見ました（笑）。

実は、全国の高専でも、ウェブアプリを授業で教えているところはほとんどない。少し教えているところは最近増えつつありますが、正規のカリキュラムで教えているところは非常に少ないんですよ。

もう一つ致命的なのは、そもそもプログラミングが好きではないと言っている人間に無理強いはできないということです。それで、高専生よりももっと若い世代にプログラミングの楽しさを教えなきゃいけないと思い始めた

というのが、最初のきっかけです。

ちょうどその頃、産業展示会とかコンサートとかをやるサンドーム福井という施設があるんですけど、そこで開催される夏休みの子ども向けのイベントを相談されて、プログラミング体験を企画しました。それで、iPadを使ってJavaScript³⁵のサブセットでプログラムを書けるみたいな企画をやってみたら、子どもたちの食いつきがよかったんですね。でも、そこから先を教えるのがなかなか悩ましいなと思っていたんです。

そんなときに、僕が小三のときに買ってもらったMSX³⁶というパソコンを、MSX誕生30周年記念ということで久々に引っ張り出してきて、Basicでプログラムを書いてみたら、意外に悪くなかった。それで作ったのが、IchigoJamです。Basicでコンパクトに学んでから次のステップに進むという流れは、今のプログラミング教育としてもありなんじゃないかと思って、IchigoJamとして発表したわけですね。すると、40代を中心に思わぬ反響がありました（笑）。その人たちが、「これ、子どもたちにやらせるとすごく反応いいんだよ」と言ってくれて、じわじわ広がっていった。

それで、牧田さんに、「子どもたちに、もっとIchigoJamを触ってもらいたいんですけど」と相談をしたら、ちょうど牧田さんのお知り合いに、工学に理解のある電通大出身の校長先生が鯖江東小学校にいるということで、夏休みに何回か足を運んで話をしました。「こんなのです」、「おー、Basicか。懐かしいね。俺もやったよ」みたいな感じで校長先生と話をしたら、二学期からのクラブ活動でIchigoJamを使ったプログラミング教育をすることが決まった、というのがおおまかな経緯です。

【牧田】 その前に市長が「うん」と言っていたんですよ。そうでないと僕

35 JavaScript 主にウェブサイトやシステムの開発に使われているプログラミング言語。

36 MSX 1983年にマイクロソフトとアスキーによって提唱されたパソコンの共通規格。または、同規格に沿って作られたパソコン自体のことを指す。

は動けない（笑）。

【河合】 福野さんのご提案に対して、市長はウエルカムな反応だったんですか。

【牧田】 福野さんのことなら何でもウエルカム（笑）。

【福野】 そういう意味では、市長の理解と、「よしやろう」と応えてくれた学校現場の方の両方のおかげだと思います。

4. スポンサー企業とのつながり

【河合】 Hana道場を見学させていただいて、非常に多くのスポンサーがについていらっしゃることを知りました。また、高齢者のIT活用向けにソフトバンクからiPadの無償提供があったというお話をお聞きしたんですが、そういったスポンサー企業と市役所、あるいはNPOとの間の仲介役のようなことも、福野さんがされていらしゃったんでしょうか。

【福野】 工作上、そういう企業の知り合いがいっぱいいるので、いろいろとあります。「こんなんやっているんだけど、ちょっと相談乗って」みたいな話とかありますね。

【牧田】 SAPもそうなんでしょう？

【福野】 SAPもそうですね。知り合いがSAPにいて「ちょっと話に来ないか」って言われて行ったのがきっかけですね。

今だと、ノースロップ・グラマン社、Hana道場、エル・コミュニティでやっている、サイバーセキュリティ教育プログラムがあります。CyberSakura（サイバーサクラ）という名前の教育プログラムなんですけど、その大口スポンサーであるノースロップ・グラマン社は、世界最大の空母メーカーです。

【福島】 へえ。それも仕事の関係でつながっていたんですか。

【福野】 いえ、それは高専つながりですね。CyberPatriot（サイバーパトリオット）というアメリカ本国でやっているイベントがあって、高校生が

6,000人ぐらい参加する巨大なコンテストらしいんですけど、ノースロップ・グラマン社から高専にその日本版をやろうという話がきたらしいんです。ただ、高専ではちょっとやりづらいということで、高専の先生から、「あなた、NPO紹介してくれない？」と言われました。それで、エル・コミュニティを紹介したら、話がまとまったということですね。何かいろいろやっている、いろんなつながりができるんだなという感じです。

5. ITを使った教育とIT自体の教育

【福島】 今って、GIGAスクール³⁷とか、学校としてプログラミング教育をやりましょうって流れになっているじゃないですか。

【福野】 鯖江市も入ってますよ、GIGAスクール。

【福島】 GIGAスクールってことは、IchigoJamを使ったプログラミング教育とは別枠で、そういった授業をされているんですか。

【福野】 何をどこまでしているか細かくはわかっていないんですけど、iPadを使った授業をしています。

ただ、iPadがあったとしても、CPU自体を使ったプログラミング体験は引き続きやったほうがいいと思っているんです。ITを取り入れた教育としてiPadを使って学ぶということと、プログラミング体験としてIchigoJamを使って学ぶということは、まったくの別ものなんですね。つまり、ITを使った教育とIT自体の教育として、それぞれ別なんです。実際、パソコンの使い方を学んだからといって、プログラムを書けるようになるわけではない。けれども、パソコン自体がどうやってできているのかを知っておくことは、ITを使った教育のほうにも必ず生きてきます。

37 GIGAスクール構想 全国の児童・生徒一人一台の端末（コンピュータ）と高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備し、公正に個別最適化された教育の実現を目指す文部科学省の取組。

【福島】 地元の子どもたちへのプログラミング教育を通じて、将来こんな鯖江にしたいといったビジョンはありますか。

【福野】 理想としては、全員が³⁸Code for Sabaeのメンバーになればいいと思うんです（笑）。

【福島】 なるほど、みんなアプリを作ることができるようになっているということですね。鯖江、やっぱり面白いなと思います、本当に。ありがとうございました。

【河合】 ありがとうございます。大変参考になりました。

【福野】 ありがとうございました。

38 Code for Sabae（コード・フォー・サバエ） 鯖江市におけるシビックテックコミュニティ。オープンデータに関するフォーラムや、IchigoJamを使ったプログラミングスクール等を主催している。